

アフリカのこころ

アフリカ人の意識革命を中心に

土屋 哲



本日はアフリカのこころ、特にアフリカ人の意識変革について問題を絞ってお話をしたいと思います。

ご存知のとおり、人間には保守本能というものがありません。現実には安住する方が楽だし、生活もしやすいというところで、やはり現実には妥協して、無用の波風は立てたくないという保守本能です。それを突き破っていくためにはどうしても意識の変革、あるいは意識革命、人間革命というものが必要になってくると思います。意識革命がない限り、人類の進歩もないと言ってしまうと思います。その意味で今日は、ヨーロッパ近代の意識の変革につ

いて最初にお話し、それとの関連でアフリカの意識革命がどういう形で起こっているのかということをお話して、最後に現代のアフリカが抱えている問題点に触れてみたいと思います。

ところでアフリカというのはご承知のように、奴隷として、植民地として、ヨーロッパの近代の犠牲になって、長い間、白人たちに苦しめられてきた人たちです。したがって当然、アフリカを考える場合は、ヨーロッパが、あるいはヨーロッパの近代が何であつたのかということ、ある程度頭に入れて、考えていかなければならない

と思います。日本の場合は Far East (極東) ということでヨーロッパから遠く離れておりまして、それが幸いして植民地支配という経験はありませんが、アフリカはまさに地図ではヨーロッパの直下にある関係で、非常に痛い目にあつてきたわけです。

ヨーロッパ近代の意識革命の功罪

さてヨーロッパの意識革命、意識の変革を考える場合には、一つは、やはり十六世紀の宗教改革というものが、非常に大きな力を持っております。ご承知のようにヨーロッパというのは十五世紀以前は中世で、同じキリスト教のカトリックが支配しておりました。そして教会が免罪符を発行し、免罪符を買えば罪が償えると言い出し、それで得た収益を教会が勝手に使えるということをやりましたのです。そこで敬虔な信徒の間から、罪を金で代えていいのか、という疑問が投げかけられ、カトリックに抗議(プロテスト)する、そういう形でプロテスタントたちの宗教改革が起こってまいりました。これが大きな意識革命になるわけです。それが結局、ヨーロッパの

近代の幕開けに大きな影響力を持ったわけです。

その中で一番大きなポイントは、中世までのカトリックの世界では、教会中心で、教会を通してキリスト教を布教した。ところが宗教改革以後は、教会が腐敗して信頼するに堪えないということで、聖書を中心とするキリスト教というものが起こってきたわけです。

つまり教会中心ですと、教会がある場所に行かないと信仰することはできませんが、聖書中心だと、どんな辺ぴなところでも聖書さえあれば信者として生きていくことができるわけです。それがヨーロッパ近代以後の大航海時代の、海外への布教の原点になるわけです。

つまり教会中心ですと、やはり教会ごと、小さな島とかアフリカとかへ一緒に移動していかないと行けません。聖書だけだと、どこへでも一人で簡単に行けるわけです。それがまず探検家とか宣教師とかを、海外に送り出して、その後ヨーロッパが、アフリカ、その他を植民地化していくことになったわけです。

一方その宗教戦争で敗れた人たちは、一種の流民、あるいは難民として世界へ散らばっていきました。アフリ

カについて申し上げますと、一六八八年にフランスのユグノーという宗派の人々が、宗教戦争に敗れて南アフリカに行きました。南アフリカにはすでに一六五二年に、現在人種差別をしている、カルビン派という戒律の非常に厳しい新教徒であるオランダ系白人、アフリカーナーたちが上陸しておりました。このカルビニズムの信仰、あるいはユグノーの信仰が実際、現地での人種差別を支えている白人のバックボーンになっております。その意味では宗教改革というものが、白人にとっては非常に大きな意識革命をもたらした反面、アフリカー人にとってそれは、人種差別を正当化する白人の根拠ともなっており、迷惑なことなのです。

近代におけるヨーロッパ人の意識革命の二つ目は、十八世紀の啓蒙思想です。これは、理性を中心に据えた物の考え方、それまではプロテスタントといえども、聖書中心にキリスト教の教えを柱に、物を考えていたわけですが、今度は人間内部の理性を柱に、物事を考えようとする動きが強まってまいります。それまでは神と人間との関係ということで、キリスト教というものが存在して

ていたのです。したがって帆船ですから季節風(貿易風ともいう)が吹いていればその風によって船は動きまわりますが、風がストップすると、今度はアフリカー人が漕いでその船を動かしていった。十八世紀までの大航海時代の白人たちはそうやって世界へ航海をし、同時に植民地支配の前哨戦みたいなことをやっていたわけなのです。

ところが十八世紀から蒸気機関の改良によっていわゆる動力の時代が訪れます。人力が不用になってまいります。そうするとアフリカー人を奴隷として買う必要がないわけで、(これは白人の勝手な論理ですが)リンカーンなどの奴隷解放という動きはそういう中から起こってくるわけです。だから奴隷解放という点、言葉はとても美しく聞こえますが、アフリカー人側から見れば奴隷としての人力が必要なくなったから、今度は解放したんだ、ということになるのです。そして、その代わりに植民地支配という形で、じかにアフリカ大陸の内陸部に白人が入ってまいります。

先程の啓蒙思想のお話にかえりますが、先程申し上げました啓蒙思想の中心の柱である(法の精神)、いわゆ

いたのですが、啓蒙思想によってそれ以後は人間の理性を柱に据えて、人間対人間の関係で、物事を律しているという傾向が生まれました。したがって、宗教改革とは違った、一種の人間中心主義とでもいった思想が育ってきます。それが啓蒙思想で、十八世紀頃から起こります。

それと同時に科学が発達し、ヨーロッパ近代の二つ目の大きな意識革命を押し進める要素になったのです。具体的に申し上げますと、モンテーニュという人の『法の精神』(一七四八年刊)、ルソーの『社会契約論』(一七六二年)、それからドイツのカントの『純粹理性批判』(一七八一年)、『実践理性批判』(一七八八年)、『判断力批判』(一七九〇年)、今申し上げた人たちの著した本の題が示しているような考え方が啓蒙思想の柱になっております。

それと同時に、同じ頃の一七四四年にジェームズ・ワットというイギリス人が、蒸気機関の改良に成功して、これがヨーロッパの資本主義というか、工業化に非常に大きな役割を果たしました。それまでは、大航海時代の立役者である船にしても、帆船で、帆と人の力で動かし

る法律というものが、この段階から人間社会に重要な役割を果たすようになってまいります。人間の世界観あるいは宇宙観の構造は、それまでは神と人間の関係で成り立っていたわけですが、この啓蒙思想から人間と人間の関係を、理性を柱にして法律が規制していくという形に変わります。そして、それが十八世紀以降のヨーロッパの近代化を支えてきた考え方です。だからそれまでは、あらゆる世の中の動きというものは、すべて神の掟ということに還元されて考えられていた、それまでのキリスト教社会では考えられなかったことが起こったのです。

この啓蒙思想以降は、人間が人間との契約とか、そんな人間同士の取り決めでこの社会を運営していく、そして法律がそれを保証するという形になったわけで、だから、これは非常に大きな西洋近代の意識革命になるのです。

しかしながらそういうヨーロッパの啓蒙思想によって整備された法体系というものは、アフリカー人側から見ると自分たちを縛りつける悪法になるのです。つまり現在の南アフリカのアバルトヘイトで顕著に見られるように、黒人たちはそういう白人たちが勝手に作り上げた法

律によって、がんじがらめに締めつけられ、身動きもできない状態におかれているわけです。これは、後ほど黒人意識運動のところでも申し述べたいと思います。

さらに最初にお話ししました宗教改革についても、アフリカ人側から見ると迷惑千万な意識革命であったのです。それは選民思想です。プロテスタントの考え方の骨子にある選民思想のことです。つまり、選民思想というのは自分が神から選ばれているという意識、だから逆に言うとう自分以外の人は神から選ばれていないんだ、そういう考え方にもなってくるわけです。したがって、その選民思想によって、白人は神から選ばれたものだ、ところが黒人はそうじゃないんだ、われわれは神の思召によって、黒人を教化するために、アフリカに来ているんだ、と信じ込み、黒人を差別していったのです。

二つ目の、啓蒙思想の方ですが、それまでのキリスト教では、人間を含めて万物は、神が造り給うたものだ、という考え方がずっと続いてきたわけです。それが啓蒙思想の普及にもなっていて、理性を柱とする考え方が主流になると、チャールズ・ダーウィンのような進化論とい

う考え方が現れてきます。これは人間というのは、サルからだんだん進化してきたものだ、そして現在の環境に一番適したものだけが生存するんだ、だから環境に適さないものは落ちこぼれていくんだ、という考え方になるわけです。つまり適者生存と優勝劣敗の思想です。これが人間社会に適用されると白人が一番環境に適したものであり、黒人というのはそういう意味からいうと、サルとか、チンパンジーに近い、劣性のものという考え方になってくるわけです。

したがって選民思想と進化論のそういう考え方で、白人がアフリカを植民地支配し合法化していく、一つの論理的な根拠にしていたわけです。だから宗教改革なり啓蒙思想というのは、白人にとってはヨーロッパ近代を支えてきた大きな意識革命であったのですが、逆にそれをアフリカ人側から見ると、そのためにとんでもないひどい目に合わされてきたということになります。

アフリカ人の意識革命の歴史

意識の变革について、お話ししたいと思います。二十世紀に起こったアフリカ人の意識革命には、英語圏で起こったパン・アフリカニズム運動、フランス語圏で起こったネグリチュード運動、それに一九七〇年代の南アフリカで起こった黒人意識運動の三つがあります。いずれも今まで申し上げてきたヨーロッパ近代のヨーロッパ人たちの意識革命の裏側で、植民地支配をされて、痛みつけられてきたアフリカ人にとっては屈辱的な、そういう人種間の厚い壁を、打ち破ろうとするところから起こった運動です。

まず、パン・アフリカニズムについて。これは英語圏で起こった運動です。ヨーロッパの白人がアフリカを植民地支配するようになったのは、大体十九世紀の半ば頃ですが最盛期になります。ヨーロッパの、俗に言う帝国主義と言われる時代ですが、いろんな国がアフリカを侵略していった。そして行き着くところまで行き着いたものですから、今度は白人同士でアフリカを舞台に植民地の争奪戦を演じる危険が生じてきた。

そこで白人たちは一八八四年から八五年にかけてベル

リンに集まって、その時点でイギリスが入り込んだ地域をイギリスの植民地にする、フランスが入り込んだ地域はフランスの植民地にするといった具合の会議を開きました。これがベルリン会議、またはアフリカ分割会議という会議で、その後、第二次大戦後、アフリカが解放された後までも、これが非常に大きな影響をアフリカ人に与えるわけです。結局このアフリカ分割会議によって法的に白人がアフリカを自分の植民地に編入してしまっただけです。

こういう動きに対して、当然アフリカ人側からは反発と抵抗が起こって来るわけで、それが、パン・アフリカニズム運動という形をとって、一九〇〇年頃から英語圏で起こってまいります。そしてこの運動の中心的役割を果たしたのが、W・E・B・デュボイスという混血のアメリカ黒人ですが、デュボイスは一九〇〇年に、「二十世紀の問題はカラーライン、つまり皮膚の色の境界線の問題、つまりアジア、アフリカ、アメリカ、その他の島々に住んでいる人間の皮膚の色が、より白いか、より黒いか、そういう関係の問題である」と、その時点で言っ

います。事実二十世紀というのは、まさに、デュボイスの予言通りに、そういう皮膚が白いか黒いかが、これは南アフリカの人種差別の問題を含めて、大きな焦点であったと思います。

だから世界的な視点から見ますと、ヨーロッパ近代の宗教改革、あるいは啓蒙思想から生まれた歪みとしての、階級間の差別は、消滅したかのような気配が、現在、濃厚にうかがえますが、人種問題、つまり人種間の差別意識は、なお克服されるべき問題として残っています。

このまへの湾岸戦争を見ておきますと、なおさらその感じがいたします。アラブ人、あるいは黒人たちがアメリカの爆撃に対して、どういう気持ちで受け止めているのか、それが今後出てくるんじゃないかというふうに考えます。結局そういう意味で、二十世紀に残された最大の問題として、人種問題が今後も尾を引くと思います。だからそれをどういうふうな形で解決していくかという問題が、私たちのこれからの問題として残されて来ているわけです。

パン・アフリカニズムのことにかえりますと、デュボ

で戦うわけですから、お互いに戦場で人種差別をしておったのでは戦争にならないわけです。やっぱり対等に扱わないと戦えないのです。そしてお互い戦友として、同志として語り合っているうちに、黒人は目覚めていく。そしてそういう目覚めた全世界に散らばっている黒人が連帯し、あらゆる力を結集し団結して白人支配の壁を打ち破ろうというのが、パン・アフリカニズムの精神になつていったのです。だから戦争は必ずしも黒人にとつては、マイナス面ばかりではなかったわけです。

第二次世界大戦の時も同じことで、もしアフリカの兵隊がいなかったならば第二次世界大戦で連合軍が敗北していたかもしれないといわれるほど、アフリカの人々が連合軍の勝利に貢献しているのです。当然戦争が終わったからアフリカを解放し、独立を認める約束を白人がしていたわけで、その結果一九六〇年以後のアフリカの独立が達成されることになったのです。ともかく戦争というのはそういうアフリカ人の意識革命に大きな力を持ったのです。そして一九四五年の第五回大会では主役がアメリカ系黒人に代わって、ンクルマ、ケニヤッタらアフリ

イスが中心となった運動は四回大会を開きました。この人の考え方は、(才能ある十分の一 (the 'Talented Tenth')) と言いますが、要するに黒人の中でも白人に決して劣らない、才能ある黒人が十分の一はいる、その十分の一には白人と同じ権利を与えてもいいのではないかという、漸進的な改良主義、つまり体制をひっくりかえそうというのではなくて、せめて白人に劣らない才能を持った黒人の十分の一の人には、白人と同等の公民権を与えろという主張です。

このような主張は、植民地支配をされているアフリカの人々にとっては到底受け入れがたい問題ですが、しかしその時点では非常に意味があったのです。デュボイス主導の第一回パン・アフリカン会議は一九一九年にパリで開かれました。ということは第一次世界大戦の終わつた直後ですね。ではなぜこういう運動がアメリカの黒人から起こつたのでしょうか。

第一次世界大戦の時に約十万人の黒人兵がアメリカから出征し、西部戦線で活躍した。これが黒人の意識の変革に大きな力をもつたのです。つまり白人と一緒に戦場

カ勢が数多く参加し、やがてアフリカの独立が達成されていったという経緯があります。

つぎに、二つ目の意識革命、つまりフランス語圏で起こつたネグリチュード運動に話を移します。これもやはり同じ植民地支配という、ヨーロッパ近代の厚い壁を打ち破ろうとする目的で、一九三〇年代のパリで起こつた運動です。

イギリスとフランスというのは湾岸戦争でもいろいろ意見が食い違つておりましたが、民族が違うものですから、植民地を支配する体制も違い、英語圏では間接統治、フランス語圏では同化政策という形をとつたわけです。

英語圏の場合、間接統治というのは、植民地の現地最高支配者としてイギリス人が総督におさまる、その下に現地の王様、アフリカ人のキングを置いて、植民地支配以前からの統治形態を温存する。そして総督が、この現地の王様を掌握する、という形をとるのです。そして総督が現地のアフリカ人の王様に非常に重い税金を課すわけです。その税金を取り立てて、本国の富を潤すという形をとつていたことになりました。だから、この重税と搾取

に対する現地一般民衆の不满は、現地の自分たちと同じ人種の王様に向けられ、総督は安泰でおられたのです。

今でも、かつてイギリスの植民地であったマレーシアでは、イスラム教の国ですが、大統領にはもとの昔からの王様、スルタン、またはサルタンが互選で選ばれています。そして別に首相がいて、近代国家としてのマレーシアを現実には動かしているのです。だから統治構造が二重の構造になっているわけです。精神面では、昔ながらのイスラム教の統治形態を片一方でもちながら、同時に近代的な統治機構をもっていることになりました。

アフリカのナイジェリアでは、このスルタンの代わりに、オニとかオバという王様が現在もいまして、昔ながらの精神的な支えとして、民衆の厚い信頼を受けています。このようにイギリスの統治形態は、非常に政治的であったために、アフリカ人側の抵抗運動もパン・アフリカニズムという、きわめて政治的な形態をとったわけです。

一方、フランスは、同化政策、つまりアフリカ人を白人に同化してやるという、いわば直接統治の形態をとり

意識革命の運動を最初にやった人はアフリカ人というよりも、大体カリブ海域の人が多くいます。アフリカ人の場合、アフリカはもともと自分たちの生まれ育った国ですから、比較的おっとり構えているわけです。ところがカリブ海域の人たちは、大航海時代に奴隷としてアフリカから連れてこられた人です。そういう人たちは自分の皮膚の色の黒いということの文化的意味を知りたい、そのために故郷であるアフリカへ帰りたいという、望郷の怨念が人一倍強いわけです。ちょうど日系のアメリカ人なんかもそうだと思うんですが、彼らは皮膚が黄色い、しかし、アメリカでキリスト教徒になり英語ばかり喋っている、そうすると自分の皮膚の黄色いということの意味がぜんぜん分からなくなってしまうわけです。そういう意識が、ブラジルの日系人にもあると思います。だから死ぬまでに一度は日本へ帰って、自分のアイデンティティを確かめてみたいという気持ちを持た持っています。したがって奴隷としてアメリカとかカリブ海域へ連れ出されて行ったアフリカ人たちは、そういう望郷の気持ち、自分の皮膚の黒い、しかし、キリスト教文化によつ

ました。だから植民地からの優秀なアフリカ人をパリに連れて来て、そこで教育して、限りなくフランス人に近い、白人の教養をたっぷり身につけたアフリカ人をつくらせて本国に送り返す。その人たちが政治の中枢に治まるという形です。したがって今までの古い伝統文化は、むしろ英語圏の方で残されているということになります。

だからこそ、ネグリチユード運動という、そういう同化政策に対して真つ向から敵対する同化拒否、つまり自分たちは白い文化に汚染されるのは嫌だといって、黒人に固有の黒人の文化を主張する意識革命運動がフランス語圏で起こってくるのです。この運動は一九二〇年代という第一次世界大戦後のヨーロッパ近代の、末期的文化状況の中から一九三〇年代にかけて、黒人意識に目覚めたパリに留学中の黒人たちの間から、起こってまいりました。

ところで、このネグリチユード運動の中心人物は、カリブ海域出身のエメ・セゼールとセネガルの大統領になった詩人レオポール・セザール・サンゴールです。パン・アフリカニズムの場合もそうですが、アフリカ人の

いろいろな教えこまれるのだが自分の心の中にはどうにも違和感が残る。つまり、違うものを感じるわけです。

そうすると、やっぱり自分の本当のものは何だということとを確かめたい、そういうことでアフリカへ帰ろうということになり、この望郷の念がアフリカ人の意識革命のエネルギーというか、原点になるのです。

さてネグリチユード(Negritude)というのは(黒人性)という意味ですが、このネグリチユード運動の場合もやはりカリブ海域出身のセゼールが中心になって、たまたまフランスに留学していたサンゴールと協力してこの運動を推進していったのです。

ところで面白いことに、このセゼールはこう言っているのです。「黒さとは非存在ではなくて、拒否である」と。ここで非存在と言っているのは、存在しないということ、つまり人間として存在しないということ。セゼールが言いたいことは、奴隷として連れ出された皮膚の黒い自分たちだつて、人間として存在しないんじゃないんだ、俺たちも立派な人間として存在しているんだ、ということとを自己主張しているのです。だから黒人を、人間扱い

しない白人の同化に対して真つ向から拒否する、つまり白人文化に対する拒否を、同化拒否を宣言したわけです。

それに対してサンゴールは「ネグリチュードは独立と同様に、まず第一に否定、他者の拒否であり、(ここまでは同化の拒否を言っているセゼールと同じなんです)他者の拒否は自己肯定である」と言っています。ところでセゼールの場合は、カリブ海域に奴隷として移送されてきた人たちの子孫ですから、自分の皮膚の黒い、その実体というものが分かっているのです。だから俺たちは、同化されるのは真つ平だとまでは言えるのですが、それを肯定することはできないわけです。つまり皮膚が黒いということがどういう意味を持っているのか、その実体が分かっているからです。それがサンゴールになりますと、これはれつきとしたセネガルの人ですから、自己肯定ができるわけです。いずれにしても、そういう形で植民地支配に逆逆するアフリカ人の意識革命が二十世紀に二つ起こったわけで、これが黒人に自覚を呼び起こして、第二次世界大戦後の独立へとアフリカは動いていくことになります。

ます。以来南アフリカ連邦はイギリスの自治領となり、英連邦の一員に加わります。これは白人の国ですから植民地ではないのです。白人が多く住んでいるところはオーストラリア、カナダもそうですが、自治領になるのです。そして南アフリカ連邦が成立すると、早速、一九一三年に原住民法を公布します。アパルトヘイトというのは本来、分離するという意味で、白人と非白人の居住区を分離する、つまり両者が一緒に住まないということです。

問題は人口比で、白人人口の五倍にあたる非白人が、南アフリカ全土のわずか一三%の、しかも不毛の荒地におち込まれているということです。そしてその状態を確保するために白人が、例えば黒人の移動する自由を制限するとか、いろいろな差別の法律を設けているのです。それが人種差別ということになったのです。したがって、アパルトヘイトというのは本来は居住区を分離するという意味です。そして居住区を分離するための最初の法律が原住民法です。すでに法の精神のところでお話したように、アフリカ人にとってはこんな法律を作られた

最後に南アフリカの黒人意識運動についてお話ししたいと思います。南アフリカの人種差別については去年もマンデラ氏が来日しまして、日本でも関心が高まっています。マンデラ氏はこのアパルトヘイト、つまり人種差別に反対する南アフリカ黒人解放組織ANC(アフリカ民族会議)の指導者ですが、日本ではアパルトヘイトについて、まだ理解が十分に行き届いていない面があるように私には思えてなりません。

白人が南アフリカに入植したのは一六五二年で、まずオランダ系の白人が入り込み、一九世紀のはじめにイギリス人が入り込んで、そして前からの先住民であるアフリカ人との間に戦争が起こります。もちろん近代兵器にまさる白人が勝ちます。そして一九世紀後半には南アフリカにおける(特にダイヤモンドと金をめぐる)自分たちの権利を主張するオランダ系白人とイギリス系白人同士の戦争が起こるのです。これがボーア戦争です。

当然、当時ですからイギリス側が勝利を収めます。そして一九一〇年にイギリスの主権下に南アフリカ連邦が誕生し、最高主権者はイギリスの国王ということになります。

のでは、たまったものではありません。迷惑千万のことなのです。だから法律というものは、状況によっては必ずしも良いとはいえないのです。

この原住民法によってアフリカ人は部族別にそれぞれまで住んでいた父祖伝来の土地から原住民指定地という不毛の土地に、強制的に移動させられたのです。農耕に適さない不毛の地に。これが今のホームランドといわれている土地です。南アフリカにはコーザとか、ズールーとかソトといった部族がありますが、これらもその部族別に一三%の指定地に押し込めてしまつて、残りの肥沃な土地を白人たちは自分たちのものにしてしまつたのです。

その後、一九三〇年代に世界的な不況もあって、そうした疲弊した土地における生活が苦しくなつた原住民指定地に押し込められた黒人の、とりわけ若い人たちが、大都会に対する憧れもあって、生きるための職を求めて都市に殺到してくるのです。でも職がないものですから、食うために白人の家に押し入って盗んだり、その他殺人、強姦などの非行に走るわけです。これに恐怖を感じた白

人たちは、一九五〇年に集団地域法という法律を制定し、今度は都市に殺到してきた黒人を、都市の周辺部にロケイションという名の強制収容所を作って、今度は人種別にそこに押し込めてしまうのです。日本人にもお馴染みのソウエトというのは、この一番大きなロケイションで、人口は三百万とも四百万ともいわれ、アフリカ最大のアフリカ人の街を形成しています。インド人にはインド人の、カラード(原住民とオランダ系白人との混血)にはカラードのロケイションがあります。

この二つの法律によって、農村部でも都市部でも南アフリカの全土で、白人と非白人との居住区に分離、つまりアパルトヘイトが完全に行われたこととなります。ご承知のように今年の六月に廃棄されたアパルトヘイト法基本三法というのは、この法律のことで、これでアパルトヘイトというのは一応、法律的には消滅したことになりますが、だが意識面でも白人がそういう差別感を無くすことができるのかどうか、ということがこれからの問題として残されているのです。

話を、アフリカ人側の黒人意識運動の方に戻したいと

九六一年には南アフリカ共和国という、アフリカーナーだけの国をつくりました。その後ほとんどアパルトヘイト法を強化して非白人の抵抗を弾圧していったのです。そのため抵抗運動の指導者たちとか文学者たちは、海外へ亡命するか、地下へ潜るといふ、そういう事態に立ち上がったのです。いわゆる冬の時代で、検閲は厳しくなり、非白人の書いた小説は、アパルトヘイト反対の小説ですから、すべて発禁処分にあいました。

そんなわけでアパルトヘイトに反対する抵抗運動が消滅し、完全に息の根を止められたかに見えた時に、一九六〇年代の末頃から、ステイプ・ピーコという大学生を中心とする、黒人意識運動というのが起こってきます。このピーコというのは、三年ほど前に日本でも評判になった『遠い夜明け』という映画の主人公になった人です。そしてこの黒人意識運動のバイブルとも言われる詩集『牛皮のドラムのひびき』を書いたのが、今年六月に私の招待で来日したオズワルド・ムチャリリさんです。

そもそも人間の文化というものは、自分の生まれ育った伝統的な土地、固有の風土から生まれ育ってくるもの

思います。ところで南アフリカで白人といってもイギリス系と、アフリカーナーという、オランダ系の白人とがありまして、この人口比は大体四対六です。今、人種差別をやっているのはアフリカーナーという、政権を取っている白人の方で、イギリス系の人たちは比較的リベラルで、むしろアパルトヘイトに対しては、そんなことをしておれば、自分たち白人が南アフリカから追い出されてしまうかもしれない、というような考え方の人が多いんです。したがって、むしろ黒人に同調的な人も多いことを、頭に入れておいていただきたいと思います。

そういうわけで、今アパルトヘイトを強行しているのは、アフリカーナーというオランダ系白人なんです。一九四八年に彼らが政権を取って以来、アパルトヘイトを強化していくわけですが、一九五〇年代にはそれに反対する黒人側、非白人側の激しい抵抗運動が起りました。この十年はいわゆる政治の季節でした。そして一九六〇年にシャープビル事件が起こりまして、白人政府は非常事態を宣言、マンデラさんの所属していたANCとか、その他の抵抗運動組織を非合法化したのです。そして一

です。ところが南アフリカのアフリカ人たちの場合は原住土地法によって、まず自分の生まれ育った土地から引き離されて、さらに集団地域法によって、またまた自分にとつては縁もゆかりもない、大都市周辺のロケイションに押し込められてしまったのです。

だからそういうロケイションに住むアフリカ人は二重に疎外されているわけで、自分たちの皮膚が黒いということの意味が全然分らないわけです。自分たち固有の文化の何たるかを。そして白人は、ネグリチユード運動の時も同じでしたが、白人が優れておって、黒人は劣っているんだ、だからお前たちを教育してやるんだという、そういう教育をやって、黒人たちに頭ごなしに、自分たちの支配を合理化するために、黒人は劣っているんだということを教え込むのです。

そうすると黒人は完全に無気力になってしまいうわけです。そして自分たちの伝統的な文化というもの、つまり黒人の尊厳とか、そういうことを完全に忘れて、しかも非常に劣悪な生活状態に押し込められてしまいますから、人間としての理性的な行動ができなくなると、感情

的にその日その日の利那主義に走る、そういう精神状態に陥るのです。

ピーコを中心に起こった黒人意識運動は、一九七〇年代に、そんな打ちひしがれた黒人たちの意識革命に大きな影響力をもったのでした。この運動の要点についてピーコはつぎのように記しております。

「全体として黒人はもぬけの殻、完全に打ちひしがれ、自らの惨めさの中に深く埋没、沈潜している影の存在、奴隷、羊のように臆病で、抑圧のくびきにじっと堪えている牡牛に成り果ててしまっている」と。前に述べた二つの居住地区分法によって伝統的な文化、黒人固有の文化というものから、根こそぎ断ち切られた、ロケイションに住む、そういう黒人のおかれている文化状況に対するこのような鋭い基本認識にたつて、ピーコはさらに「黒人意識とは、心の構え方、生きかたであり、これは長い間、黒人世界から発せられたもつとも積極的な叫びである。

その本質は、皮膚の黒さという抑圧の原因の周辺に、兄弟たちが結集して、その集団の力で、黒人を永久の奴

てしまった後、草の根レベルで静かに芽生えてきたというところに意味があるのです。そして一九七六年のソウエトの蜂起という形で、ソウエトに住んでいるこの黒人意識運動に目覚めた高校生とか、中学生あたりの若い人たちが、敢然としてアパルトヘイトの悪に立ち向かっていったのです。これがソウエトの蜂起です。

その後、ピーコは一九七七年に白人の官憲の手で連行され、獄死してしまいました。しかし彼の死後も、この黒人意識運動によって芽生えた、若者たちの意識革命の動きが、まだ現在も続いているのです。

これは私の意見なんです、現在南アフリカの白人政府にアパルトヘイト廃棄を決断させた原動力は、むしろ昨年来日したマンデラの指導するANCよりも、この黒人意識に目覚めた、こういう若い人たちのエネルギーの方にあるのではないかというふうに、私は見ています。こういう組織よりも、目覚めた一人一人の力の方が怖いのです。こういう人たちが南アフリカ全土で蜂起すれば、南アフリカは騒乱状態に陥り、收拾がつかなくなりま

からね。

隷状態に縛りつけている枷を取り除くよう行動を起こすことだ。」つまり黒人に自覚を与えて、白人がお前たちは劣っているという意識を黒人たちに叩き込むことよって、黒人を永久の奴隷状態に置いておこうとする、そういう白人たちの抑圧を排除するために行動を起こすことだ、と言っているのです。

さらに「この運動の基本的目標は、黒人が自分自身から逃避して、白人を見習うことにならぬことを、黒人を黒く生み給うた神の英知を侮辱するものだということを、最終的には黒人自らが自己検証を通して、信じよう（黒人の尊厳に目覚めるように）仕向けることだ。したがって黒人意識の哲学とは、集団としての黒人の誇りを表明し、理想とする自由な自我の境地にまで自らを引き上げ、到達せんと決意することである。」と言っています。これがピーコの目指す黒人意識運動の目標であったのです。

したがってこの運動は、結局、たとえばマンデラとか、そういう抵抗運動の指導者たちが地下に潜ったり亡命していった、そして組織的な抵抗運動がベシヤンコになっ

さてこれまで、おおざっぱにヨーロッパ近代の意識変革、つまり宗教改革と啓蒙思想という二つの意識革命のお話をし、その後その裏側にあつて、アフリカ人がいかにその犠牲になったかということ、さらにそういう白人の植民地支配体制を打ち破るためのアフリカ人側の意識革命を大体三つ挙げまして、お話ししてまいりました。これをまとめてみますと、最初の二つの意識革命は一九六〇年以降のアフリカの解放独立に大きな力となりました。一方、黒人意識運動の方は、今、南アフリカでアパルトヘイトを解消する方向へ白人を決断させる大きな圧力となっております。そして現段階ではアパルトヘイトは、制度として法制面ではすでに解消されたのですが、今後は果たして白人たちの意識の底にまでしみ込んでいく、そういう差別的意識をどこまで解消できるのかという意識面の問題に絞られてまいりました。その点では特にアフリカーナーたちに、抜本的な意識の変革を促すような宗教改革、カルビン派のプロテスタントに再度プロテストする宗教改革が必要ではないかと、私は考えております。

現代アフリカの課題

最後にアフリカの現在の問題点についてお話してみたいと思います。独立後まだ日の浅いアフリカ諸国が現在抱えている最大の問題は、伝統的な部族主義をどのように近代国家としての枠組みの中に、整合してゆくかという問題です。部族共同体的意識の根強いアフリカ人を、ヨーロッパ近代を支えてきた個人主義と、どう調整していくかという問題が、これからの大きな問題としてあるわけです。

現実には、今でもアフリカでは、国民としての意識よりも部族に対する帰属感の方がはるかに強いのです。そのいくつかの例を挙げてみましょう。

たとえばいろんな部族が、アフリカにあります。そして結婚は同じ部族の人としか結婚しないのです。皆さまのおじいさん・おばあさんの頃は、日本でも、東京の場合にはちょっと違います。田舎へ行けば大体同じ県の人同士で結婚している場合が多いわけですね。この県人意識よりもはるかに強い部族意識が部族の人の間にある

わけです。だからほとんどが同じ部族の人と結婚しています。

ケニアの人に聞いた話ですが、違う部族の人と結婚すると、いま日本でいう国際結婚みたいな感じになるわけです。それほど部族と部族は違うのです。さらにケニアの場合は、十四ぐらいの大きな部族があつて、それが集つてケニアという国を構成し、ケニア人ということになっているわけです。でもケニアの場合は教育を受けている人は大体二五%ぐらいだと思ふんですね。後の七五%は英語を喋れないわけで、部族の言葉しか喋れないのです。ケニアの公用語は英語なんです。だからケニア人といつても英語を喋れないとケニア人にはならないのです。そこでたとえばナイロビの首都へ来ると言葉が通じないから、どうしても同じ部族出身の者同士が集まつてしまふことにもなるのです。そして日本でも昔あつたような閉鎖的な社会構造を、そのまま持ち続けることにな

るので。それから今でも農村部に行きますと、物々交換によつて経済生活が営まれています。これは日本でも昔は自分

の家に採れたものを近所におすそ分けするという形でやりましたね。それと同じ、物と物の交換で生活が成り立っている、そういう形が非常に多いんです。しかし、子供に教育を受けさせるとなると、授業料は金納ですから、授業料を稼ぐために貨幣経済の中に入っていくことにな

るので。だから田舎にいる限りは、昔ながらの物々交換経済で生活を営み、都会に息子を教育に出す時に、貨幣経済の枠組みの中に入っていくという、そういう二重生活を営んでいるのです。

さらにいえば、たとえば諺とか民話、そういうものが現在のアフリカ人の社会生活の中で、非常に大きな比重を占めています。昔はやつぱり諺を使って子供にいろいろ教えた。諺を使った方が自分の言っていることに箔がつくし説得力があるわけですね。つまり諺というのは先祖代々受け継がれてきた人類の文化遺産で、先祖伝来の我々の人生の、生活の智慧が諺の中に盛り込まれているわけですね。だからアフリカの人たちは、小説とか、日常の会話に諺をすぐに入れるのです。そうすることによつてその人の発言に重みが加わってくるわけです。そう

いう形で現在のアフリカの人たちの共同体生活の中にも、コミュニズムと申しますが、部族社会の共有財産としての諺が濃密に生きているのです。

これはあまり関係がないかもしれませんが、本を出版した時の版權の問題があります。日本でも新潮社からウオロゲムという作家の『暴力の義務』という本が翻訳で出たことがあります。この小説の中でグレアム・グリーンというイギリスの作家の一部分が引用されていたのです。そこで欧米の新聞から書評で「これは盗作だ」ということで非難されました。それ以後、ウオロゲムは非常に才能があるという評判だったのですが、プツリと書くことをやめたのです。要するに盗作についての考え方の違いです。ヨーロッパの個人主義社会では、版權は個人の財産ですから、他人の作品を自分の小説に引用すると盗作になるわけです。しかし、口承的伝統と共同体意識の強いアフリカの社会では、発表したものはすべて共同体の共有の財産なんです。先程申し上げた諺とか、民話、昔話、これらはみんな共有の財産です。そんな軽い気持ちで、ウオロゲムはグリーン^{Green}の作品の一部を、自分

の小説に多分使ったのだと思うんです。しかしこれは欧米の個人主義社会の基準からいうと、盗作ということになるのです。

もう一つ最後に、ケニアのモイ大統領の場合を、お話ししておきたいと思います。ケニアは一党独裁なんです。つまりカヌ党という一党独裁なんです。民主主義からいうと一党独裁というのはけしからん、だから複数政党にしるということになるのです。でも、モイ大統領は複数政党になると、各部族ごとの政党が生まれ、かえって部族間の摩擦を激化して、国家としての秩序を乱す、だから一党独裁でいいんだという論法なんです。これなども近代国家を建設してゆくプロセスで、部族共同体的志向をどのような形で吸収し、整合させていったらいいのか、アフリカの現在の苦悩の一つと言えます。その意味でも依然として根強く残っているコミュニティリズムと近代化、それを今後どううまく調整してやっていくのかがアフリカの現在抱えている一番大きな問題で、これは別にアフリカだけに限らず、アジアを含めた第三世界にも共通して言えることだと思います。

最後に結びとして、こんなことを申し上げて終わりにしたいと思います。それはこの間の湾岸戦争の時に気付いたことですが、あの時、アメリカの人たちが果たしてアラブの人たちの心をどれだけ理解していただろうか、という疑問です。さまざまなこれからの社会的・文化的摩擦を考える時、二十一世紀に向けて平和な国際社会を築き上げるためには人種問題を含めて、異文化として異を立てるのではなく、本当に真心を込めて、相手の立場を十分に理解してゆくことが一番大切なことではないかと思うわけです。そのための意識革命を、私達は何度もしなくてはなりません。意識革命のないところに、人類の進歩はないからです。

〔本稿は一九九一年二月二十八日、当研究所主催で開催された連続講演会「アフリカの民族と文化」での講演を収録したものである〕

（つちやさとる・明治大学教授、ナイロビ大学名誉教授）